短 報

明細胞腺癌への分化を示した腔原発腺癌の1例

信州大学医学部産科婦人科学教室¹⁾, 同 附属病院中央検査部²⁾加藤 清¹⁾ 土岐 利彦¹⁾ 清水 元彦¹⁾ 小西 郁生¹⁾
勝山 努²⁾

I. はじめに

腔原発癌はまれであり, 全女性性器癌の約1%にすぎず, そのほとんどが扁平上皮癌である。今回われわれは, 腔入口部の潰瘍性病変の擦過細胞診に腫瘍細胞を認めた腔原発腺癌の1例を経験したので報告する。

II. 症 例

患 者: 72歳, 3経妊2経産, 閉経53歳

家族歴・既往歴: 特記すべきことなし

現病歴: 1998年5月頃から少量の性器出血が持続したため某医を受診した。腔入口部12時から2時に径約2cmの潰瘍性病変が認められたため, 当科紹介となった。擦過細胞診にて腺癌細胞が認められ, 生検組織診にて明細胞腺癌と診断された。子宮, 付属器, 尿路系など他臓器に異常は認められなかった。病変が尿道にかなり近接していたため前方骨盤内除臓術を7月に施行したところ, 腔入口部左側壁に3×2cmの病変が存在していた。

III. 細胞所見

術前の病変部擦過細胞診では, 軽度炎症性背景の中に, 立方状から類円形の異型細胞が集簇性にあるいは一部孤立散在性に認められた (Photo. 1 a)。核はほぼ円形, 中等度の大小不同を認め, 淡染するクロマチ

ンは網状または微細顆粒状で, 1から数個の非常に明瞭な核小体を伴っていた。細胞質は好塩基性でレース状あるいは微細顆粒状で, 一部濃染し, 豊富なものから裸核に近いものまでさまざまであった (Photo. 1 b)。一部の異型細胞は明細胞腺癌に特徴的な所見を呈していたが, そのような特徴の明らかでない細胞質が濃染する異型細胞も比較的多く出現していた (Photo. 1 b)。以上から, 「腺癌, not otherwise spec-

Photo. 1 Cytologic features. a: Tumor cells showing clear lace-like cytoplasm and round nuclei with one to several prominent nucleoli (Papanicolaou stain, ×40), b: Tumor cells showing dense and dark cytoplasm (Papanicolaou stain, ×40)

A case of primary clear cell adenocarcinoma of the vagina
Kiyoshi KATO¹⁾, M.D., Toshihiko TOKI¹⁾, M.D., F.I.A.C.,
Motohiko SHIMIZU¹⁾, M.D., Ikuo KONISHI¹⁾, M.D., Tsutomu
KATSUYAMA²⁾, M.D.

¹⁾Department of Obstetrics and Gynecology, ²⁾Department
of Clinical Laboratory, Shinshu University School of Medicine
論文刷請求先 〒390-8621 松本市旭3の1の1 信州大学
医学部産科婦人科学教室 加藤 清

平成12年4月12日受付

平成12年8月30日受理

Photo. 2 Histologic findings. a : Tumor cells with clear cytoplasm showing a tubular-solid or hobnail pattern (H.E. stain, $\times 40$), b : Less-differentiated portion containing tumor cells with dark cytoplasm (H.E. stain, $\times 40$)

ified」と診断した。

IV. 組織所見

腫瘍は腔粘膜と尿道の間に存在していたが尿道粘膜と連続性はなかった。腫瘍細胞は核小体の目立つ異型の強い腫大した核を有し、PAS 陽性顆粒をもつ明るい胞体を有する立方状の細胞が管状あるいは充実性腺巣を構築して増殖し、一部に hobnail 様の像を呈していた (Photo. 2 a)。一部の腫瘍細胞は細胞質が濃染し明細胞腺癌とは明らかに異なる低分化腺癌の像を呈していた (Photo. 2 b)。また約 10 mm の間質浸潤を伴っていた。以上から明細胞腺癌への分化を示す腺癌と診断した。子宮頸部、内膜、卵巣、卵管、尿道、膀胱には異常を認めなかった。

V. 考察

明細胞腺癌は婦人科領域では子宮頸部、子宮内膜、

卵巣にも発生するが、腔に原発するものはきわめてまれである。欧米では diethylstilbestrol (DES) の胎内暴露後の腔明細胞腺癌の報告が多いが、本邦では DES に関連したものはほとんどみられない。腔明細胞腺癌の細胞学的特徴は卵巣や子宮頸部に発生するものと基本的に同様であり、一般にグリコーゲンに富む淡明な細胞質を有し、一部に hobnail 細胞がみられ、その他 collagenous stroma を有する細胞集塊の存在などがあげられる¹⁾。本例では淡明な胞体に明瞭な核小体を有する細胞像を認めたが、そのような特徴が明らかではない腫瘍細胞も少なからず存在していた。組織像は基本的に細胞像と同様で、明細胞腺癌とやや低分化な腺癌が混在した像を呈していた。細胞診による明細胞腺癌の正診率は子宮頸部の約 70% に比し腔では約 30% と低い²⁾。この理由としては、腫瘍が粘膜下に存在していることなどが考えられているが²⁾、蛭田らは腫瘍細胞が十分採取されていれば診断率は上がると述べている³⁾。本例では腔入口部前壁の比較的観察困難な部位に病変が存在していたにもかかわらず潰瘍を形成していたために細胞が十分採取でき診断が可能であったと考えられる。

腔原発腺癌はきわめてまれであるが、特徴的な細胞像を認める場合にはある程度の組織型推定も可能であると思われる。

Abstract

We report a case of primary clear cell adenocarcinoma of the vagina in a 72-year-old woman. The tumor arised in the anterior to left vaginal wall at the introitus and showed signs of ulceration. A PAP smear revealed atypical round cells containing clear and abundant cytoplasm and round nuclei, with one to several prominent nucleoli in sheet-like clusters. Some nuclei with almost no cytoplasm and were scattered around the clusters.

Histologically, the tumor consisted of two portions : a clear cell adenocarcinoma and a less-differentiated adenocarcinoma.

文 献

- 1) 畠 榮, 鐵原拓雄, 三宅康之, 広川満良. 卵巣明細胞腺癌の細胞像. 日臨細胞誌 1996 ; 35 : 549~559.
- 2) Hanselaar, A.G.J.M., Van Leusen, N.D.M., DeWilde, P.C.M., Vooijs, G.P. Clear cell adenocarcinoma of the vagina and cervix : a report of the Central Netherlands Registry with emphasis on early detection and prognosis. Cancer 1991 ; 67 : 1971~1978.
- 3) 蛭田啓之, 小林貴代, 戸羽美佐子, 山口みはる, 亀田典章, 落合和徳・ほか. 腔原発明細胞腺癌の 1 例. 日臨細胞誌 1998 ; 37 : 240~243.